クリスチャンの成長

2024/3/10

　生きているものは、成長します。クリスチャンも生きていますから、当然、成長します。成長には様々な面があります。聖書知識に於いての成長。人間関係の成長。教会奉仕での成長。神様への信頼に関しての成長と、結構奥深いものです。バランスよく成長できれば良いのですが、なかなかそうはいかないのが実情です。聖書の知識では目覚ましく成長しているのに、人間関係では全くダメなどということもあり得ます。今日は神様への信頼の成長を取りあげてみましょう。

　生まれる前の成長　赤ちゃんは生まれる前から成長しています。クリスチャンもクリスチャンになる前からの成長があります。キリストの色々な教えに触れたり、クリスチャンの友人とお付き合いしたりしているうちに、「神様を信頼する生活っていいいな」と。思うことがあります。宗教的環境で育つとか、キリスト教的文化の中で育つとかいうのも、生まれる前から、神様を信頼する気持ち、心構えを備えるにはとても有利なことです。さらに多くの人達には気づかれていないことですが、神様に似せて造られた人間として、その人間性を素直に生かして行くことによって育てられて行く、まじめな宗教的感覚などがあります。

　生まれてすぐの成長　クリスチャンとして生まれるというのは、単純に、聖書で教えられている、天地をお造りになった神様を信頼すること、イエス様が「天の父」とお呼びになった神様を信頼し始めることです。多くの場合、自覚なしに、いつの間にか、何となくというような体験であるかもしれません。それでイエス様は、風は吹いても、どこからどこに行くのか分からないようなものだと、譬えておられます。それは心理的には小さな一歩かも知れませんし、大きな一歩かもしれません。でも、神様に信頼して行こうとしたときに始まります。それは生まれながらの素直な宗教性が、天地創造の神への信頼と結びついたときに起こるものです。

　救いを求める信仰から始まる成長　その信頼は、人世苦から逃れたいからと言って、神様にお祈りするところから始まるかもしれません。「すべて重荷を負って苦労している者は私のもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう」とおっしゃったイエス様に、「よろしくお願します」と申し上げて、頼ったときに始まったかもしれません。自分の生き方をしっかり定められないで、迷っていた時に、イエス様の教えに感動して、「そうだ、この教えを座右の銘としてやっていこう」と考えたところから、始まったかもしれません。でも、「いくら素晴らしい教えでも、「自分の意志は弱いし、力は不足していると」悩んで、「イエス様、助けてください」と、心の中でつぶやくように祈ったことによって、さらに少し、成長したかもしれません。そして、いつの間にか、「あれ、お前、最近変わったな！？」などと友人に言われ、「ほんとうだ。イエス様の助けがあったらしい」と気づいた時に、もうちょっと、成長したのかもしれません。

なんでも神様に頼るようになる成長　そんなことがあった後は、何でもかんでも「イエス様お願いします」と、密に祈るようになったというなら、そこにも神様に対する信頼の成長が見られます。これは、人間同士の信頼関係と同じです。ちょっと難しいことがあったら、少し手に負えないことがあったら、「叔父さんにお願いしてみよう。お爺ちゃんに頼っちゃおう」というのと、同じです。人間関係としても、頼られることは嬉しいことですが、あまり身勝手な頼りかたばかりをしていると、嫌われてしまいます。神様も、普通の人間以上に、頼られることがもっともっと大好きです。「頼まれると嫌とは言えない」ようなところさえあります。だから、「どうして俺のところに頼ってこないんだ」と怒る、親戚のおじさんのようです。頼られるのが好きで、頼られないと気分を悪くなさるのです。でも、あまりお我儘な御願いばかりをしていると、聴いて下さらないこともあります。この辺の駆け引きの中で、神様との信頼関係を築いていくのです。

我儘なお願いをしなくなる成長　神様はわがままでないお願いを、ことさらに、喜んでくださいます。わがままでないお祈りとは、どんな祈りでしょう。それは自分のための祈りではなく、他の人のための祈りです。他の人の祝福のため、他の人の癒しのため、他の人の助けのために祈ることです。ただ、他の人ということではなく、自分を嫌っている人、自分を憎んでいる人、自分に害を及ぼしている人、つまり自分の敵のために祈ることを、神様は特別に喜んでくださるのです。「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」というのが、イエス様の教えです。復讐や呪いで仕返しをするのではなく、親切な行いや祝福の祈りで復讐することが出来るようになると、クリスチャンの信頼、信仰態度としては、一段高いところに到達したと言えるでしょう。

自分が役に立てることを願う成長　自分が祝福されたり、自分の周囲に良いことが起こったりすることを願う祈りから、自分の人生が神様のお役に立つように、他の人たちの益となるように願う祈りに代わることです。自分を犠牲にしてでも、神様と他人の役に立ちたいと、願う祈りをする成長です。重荷を負っていると助けを願う「よちよち歩き」の信頼から、自分が誰かの助けになりたいと願うようになる、信仰の成長です。これは、聖書の記事にあるように、お腹をお空かせた大群衆を前にして、少しでもお役に立ちたいと、自分の小さなお弁当を差し出した子供のような、無垢な願いから始まります。イエス様はその子供の小さな捧げものを喜んで受け取り、それを大きく、大きく、大きく、お用いになりました。そのような純真な心をイエス様は大切にし、育て伸ばそうと願われたのです。

自分を奉げる信仰への成長　神様への奉仕ならば、人々の救いの為ならばと、家も家族も名誉も地位もすべて捨てて、献身して行く信仰への成長です。素直な小さな奉仕は大切です。しかし安易な献身はお嫌いになります。それは厳しく挫折の多い道だからです。それでイエス様は、いとも容易に「あなたに従って参ります」などと言う人たちを前にして、あえて、「私に従って来る者は、自分を捨て・・…」云々と、非常に厳しいことをおっっしゃって、中途半端な献身の腰を砕き、生半可な決意に水を浴びせる様な事を、あえて、お語りになりました。このような、何段も高い献身の信仰は、究極的には殉教への信仰へつながるものです。生まれながらに与えられた人間の姿、神様に似せて造られた人間性の、極みを見せられるような行為、たとえばマハトマ・ガンジーのような生き方をする人、できる人もいます。素晴らしいことです。でもそれほどの精神力は持てないまでも、神様のお力を借りて、それをやっていく人たちは結構沢山います。私は最近、クリスチャンになって間もなく読んだ、「チベット開拓宣教」という本を読み返しました。そこに記録

されていた宣教師の活動に比べると、私がフィリピンの山岳奥地でやって来た働きなど、日本アルプスの冬山登山と、子どもの庭先でのキャンプを比較するようなものです。

祈らない、お願いしない信仰への成長　神様がいろいろな祈りを聞き届けてくださることを、体験を通し、またほかのクリスチャンたちの証を通して知り、何事でも神様にお願いして生きる信仰に到達するのは、素晴らしいことです。しかし、祈らない信頼、あえてお願いしない信頼も大切です。私は、自分と同じくらいの年齢の伝道者としては、かなり厳しい経済的環境の中で働いてきました。ちゃんと、栄養失調で目が見えなくなる体験もしました。でもお金を与えて下さいとお祈りしたことは一度もありません。それなのに、全体的に見ると、結構裕福に暮らしてきました。裕福というのは自分がどれだけ多く持っているかということではなく、どれだけ多く与えることが出来たかということです。

ご存知の通り、私は2年と少し前、直腸癌の手術を受けました。その後の検査でさらにステージ4の肝臓癌が発見され、手術不可能と言われ、余命も１～３年と告げられました。末期肝臓癌で、治療不可能と判断された患者たちを専門に治療し、かなりの効果を上げているクリニックに、セカンド・オピニオンを求めましたが、「私たちには何もできることはありません。今までのお医者さんにお願いしてください」と、お断りを受けました。たしか、昨年の夏のはじめころだったと思います。ところが、この2月の中ころに、ペット/CT という最先端の検査をうけた結果、肝臓癌自体と、体のそこここにあった癌の兆候も、すべて消失していると言い渡されました。

多くの人が、私のためにお祈りをして下さいました。本当に有難い限りです。そういえば、私の妻も、3年ほど前に、大喜びでスキップを踏みながら、天の御国へ駆け登って行きました。そして、思い出したのです。私たち自身は･･･家内の場合も含めて、「癒して下さい」という祈り、お願いは、一度もしたことがないのです。私も妻も、神様は癒すことがお出来になると信じていますし、私たちの祈りが聞かれて、癒された人たちを幾度も見てきました。でも、自分たちが癒されるようにという祈りは、････改めて考えてみても、一度もしたことがないのです。私たちは共に、「神様のみ手の内に生かされている。生きるも死ぬも神様の御手の中。一切心配なし」という信仰を持っていたからです。癒された信仰も素晴らしいものです。癒されない中で、神様に委ね切って生きる信仰もまた、美しいものだと思います。

それで･･･、このたび、癌が消失してしまったという診断を受け、これからどのようにしたら良いのか、少々とまどっていますが、ことさら大騒ぎをすることでもないと感じています。神様は、「もう少しこの世で生きて働きなさい」と、言っておられるのかなと思い、よろしくお願い申し上げますと祈り、周囲の人達には、「憎まれっ子世に憚る」です。もう少しご迷惑をかけることになるやもしれませんが、よろしくお願いします」と、言い回っています。

使徒パウロも、多分、同じ信仰を持っておられたのだろうと思います。肉体に弱さを抱えていた先生は、自分の弱さが取り除かれるように、「3度も」祈ったと言い、それでも癒されなかったと告白しています。彼の表現の仕方から見ると、その後はもう、祈り続けなかったようですね。パウロ先生は、その弱さを抱えて生き

る生き方が、神様のみ手の中で生きることだと感じていたのでしょう。イエス様は空の鳥を見なさい。撒くことも刈り取ることも蔵に取り入れることもしない。それなのに、あなた方の天の父は、彼らを養っていた下さる」と、神様に頼り切る高い信仰、信頼の姿を教えてくださいました。さらに、「２羽の雀は1アサリオンで売られ、５羽の雀は2アサリオンで売られている。しかしそれらの１羽でさえも、神様の知らないところで地に落ちることはないのです」と、もっと高い信頼の在り方を示して下さいました。天の父なる神様に信頼しきって生きる生き方が、究極的な信頼の生き方なのです。

私たち夫婦の信仰の在り方を、あたかも自慢げに話してしまい、申し訳ありません。最近身近に起こったことですので・・・・・。参考になれば幸いです。多くのクリスチャンたちから、「癒しの信仰の勝利、奇跡ですね」などと言われて、ちょっと違うかなと感じているだけのことです。私たちの信仰のこの面は、案外高い地点まで来ているかなと、勝手に思い込んでいるだけです。他の面を見ると・・・・・とんでもない牧師ですので、良いところだけ見てください。見てくださいと言わなければ見てもらえない、情けない牧師ですが、今後も、よろしくお願い申し上げます。神様は私の信仰にお答えくださったのではなく、お祈りしてくださっていた、皆様の信仰にお答えくださったのかもしれませんね。